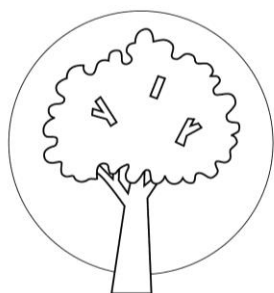
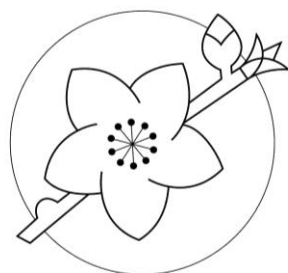


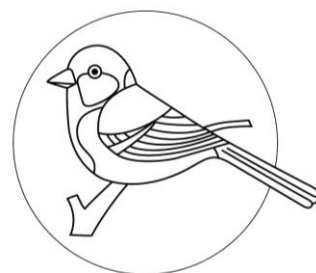
令和4年度
福島市民憲章作文コンクール
作品集



市の木 ケヤキ



市の花 モモ



市の鳥 シジュウカラ

福島市民憲章推進協議会



福島市民憲章

わたくしたちは、みどりにつつまれた信夫山と清い流れの
阿武隈川をもつ福島市民です。

福島市は、^{ちみ}地味豊かなしのぶの里に古くから開けた人情の
美しいまちです。

わたくしたちは、平和で、さらに住みよく希望にみちたまちを
つくるため、この市民憲章をさだめます。

- 一 空も水もきれいな みどりのまちをつくりましょう。
- 一 教育と文化を^{たつと}尊び 希望に輝くまちをつくりましょう。
- 一 親切で愛情あふれるまちをつくりましょう。
- 一 きまりを守り、力をあわせて 楽しく働けるまちをつくりましょう。
- 一 子どもからおとしよりまで安全で健康なまちをつくりましょう。

昭和 48 年 4 月 1 日制定

福島市民憲章作文コンクール

作品集の発刊に寄せて

「福島市民憲章作文コンクール」は、市民憲章の普及・啓発のため実施しております。中学生の部は、福島市内に住む中学一年生を対象に実施しており、今回で十八回目の開催となります。また一般の部は、福島市に居住、もしくは通勤・通学している高校生以上の方を対象に実施しており、今回の開催で四回目となります。昨年度に引き続き今年度も、両部門ともに作文コンクール開催以来最多数の応募をいただきました。

ご応募いただいた皆さんに御礼を申し上げますとともに、本コンクールを通して、市民憲章の精神がさらに多くの皆さんに浸透される機会となるよう願っております。

さて、応募のありました作品を拝読いたしましたところ、福島市の豊かな自然、地域の人々とのつながり、交通事故の防止、ゴミ問題などのテーマが多く見受けられました。

このことから、川や山、植物や果物など福島市の豊かな自然を守り後世につなげていきたいという思い、徐々に人との関わりが増え改めて感じる人々とのつながりやふれあいを大切にしたいという思い、さらに、身近な課題について真摯に向き合う姿勢が強く感じられる内容でした。

いずれも市民憲章の理念を十分に理解され、応募いただいた皆さまの感性が活かされた素晴らしい作品となっております。

是非とも多くの方にお読みいただき、作品内容に共感いただければ幸いです

福島市民憲章は、市民全ての幸せと、郷土福島の限りない発展を願いながら、快適で明るく住みよいまちづくりを進めるためのよりどころとして、昭和四十八年に制定され、令和五年度は憲章制定五十周年となります。今後とも、様々な普及・啓発活動を通して市民憲章の意義を一人でも多くの市民の皆さま方に理解していただき、「住んでよかったと、心から思える福島市」の実現を目指していききたいと考えておりますので、ご協力よろしくお願い申し上げます。

結びに、本コンクールの開催にあたり、各学校で作文指導にあたっていただきました先生方をはじめ関係各位に対しまして、心より御礼を申し上げます。

令和五年一月

福島市民憲章推進協議会会長

山 本 和 宏

希望にあふれたまち

「その当たり前を『憲章』としないといけない世の中になってしまっているということなのだろうか。」これは、令和四年度福島市民憲章作文コンクール中学生の部において金賞に輝いた、福島市立松陵中学校の根本ややさんの作品の一節です。

根本さんをはじめ、福島市内の中学一年生、六六二点に及ぶ作品の中から選ばれ入賞された皆さん、おめでとうございます。

皆さんの作品には、自分が生まれ育ったまちである福島市を改めて見つめ直し、気づいたことや考えさせられたことが綴られています。それらは、瑞々しい感性と優れた表現力に裏打ちされたものです。そこには、現実を正面から見つめ、考える、素直で誠実な姿勢があります。

文章を書くということは、考えるということです。ここに、書くことの価値の一つを見い出すことができます。皆さんの作品に共通しているのは、課題意識です。「なぜなのだろうか」「これでいいのだろうか」「このままでいいのだろうか」「なにができるのだろうか」「なにをするべきなのだろうか」などの思いがあふれています。このようなところに、福島市民憲章作文コンクールに取り組む意義があります。中学一年生だからこそ感じることもあるはずです。それを、皆さんは見事に表現してくれました。

皆さんは、今回の取組を通して「福島市民憲章」の存在を知ったことと思います。「わたしたちは、平和で、さらに住みよく希望にみちたまちをつくるため、この市民憲章を定めます。」に続く五つの内容を読むと、なんだか幸せな気持ちになり、やる気が湧いてき

ませんか。自分たちのまち、福島市をもっとよくしていこうと考えるきっかけが、今回の作文コンクールだったのかもしれない。

皆さんは、これからの福島市を、そして福島県や日本を支え、発展させていく大切な人材です。将来、皆さんが、どこに住み活躍しようと、ふるさとである福島市を誇りに思い、自慢できる人でいてください。福島市のよさは、市民憲章に出ています。今回、皆さんが書いた作文にも福島市のよさが表れています。

根本さんの作品には、こんな内容もあります。「当たり前のことができなくなったから『市民憲章』が制定されたというわけではない。福島市の良さをいつまでも受け継ぎ、さらにより良いまちを目指していこうとするみんなの願いが込められたものなのだ。」

皆さんの作品から、キーワードを一つ考えたとしたら、それは、「希望」です。この言葉には、明るさ、可能性、思いなどが感じられます。希望に輝くまち、希望にみちたまち、そして、希望にあふれたまち、それが福島市です。

皆さんが、これからも、ものごとを見つめ、考え、それを表現し、希望を胸に、力強く生き生きと自分の人生を歩み、活躍してくれることを願っています。

令和五年一月

福島市民憲章推進協議会委員

福島地区中学校長会 福島市立野田中学校校長

高 澤 正 男

【中学生の部】

目次

◇金賞

平和で、住みよいまちとは

福島市立松陵中学校

根本やや……………1

◇銀賞

はじめの一步

福島市立松陵中学校

佐藤駿太……………2

安全で健康なまち

福島市立松陵中学校

村松美苺……………3

福島の恵みに恩返しを

福島大学附属中学校

落合向日葵……………4

◇銅賞

みどりあふれる『フルーツライン』

福島市立信陵中学校

浅田真宙……………5

『思い』を『行動』へ

福島大学附属中学校

大原詩子……………6

世界の環境のために福島から出来ること

福島大学附属中学校

北山悠真……………7

◇佳作

福島リベンジャーズ

福島市立信陵中学校

菅野公大……………8

優しさが溢れるまち

福島市立信陵中学校

小島千佳……………9

みんなで支え合う福島

福島市立信陵中学校

遠藤愛結……………10

少しのきっかけ

福島市立信陵中学校

八代嘉大……………11

僕の最強福島水

福島市立信陵中学校

高橋友貴……………12

福島 の 空

進化し続ける福島のあふれる魅力

親切は人を笑顔にする

みどりのまちを受けつぐために

明るい福島市へ

蝶から考える福島市の自然

いつも見ている風景

福島市民憲章が気づかせてくれたこと

福島市立西信中学校

福島市立西信中学校

福島市立松陵中学校

福島市立信夫中学校

福島大学附属中学校

福島大学附属中学校

福島成蹊中学校

福島成蹊中学校

影山 凛 緒

村上 莉 心

丹野 晃 成

鈴木 ひ ま り

矢部 く る み

守谷 史 佳

桑島 杏 花

猿田 慧

金賞

「平和で、住みよいまちとは」

福島市立松陵中学校

根本 やや

憲章。漢字から推測すると、憲法みたいなものなのだろうか。よくわからなかったので調べてみた。「重要で根本的なことを定めた取り決め。基本的な方針や施策などをうたった宣言書や協約」とある。では、福島市民憲章はいつできたのか。昭和四十八年四月一日とあった。私のイメージでは、憲章というともっとも古くからあるものだと思うのだが、私の母親の生まれる数年前にできたもので、割と新しいものだと思った。

母親に福島市民憲章のことを聞いてみると、「それって何？」とのことだった。あまり知られていないらしい。逆に私がその内容を母親に教えてあげることになった。すると母親からは思いがけない言葉が返ってきた。「それは人として当たり前のことだよね。」と。

確かにそれは人として当たり前のこと
で、あえて「憲章」として制定すること
のか、と私も疑問に思った。その当たり
前を「憲章」としないといけない世の中
になっ
てしまっているということなのだろうか。
思い当たることがある。

登下校中によく目にするものがある。道
路に捨ててあるペットボトルやごみの入
ったビニール袋。狭い道路なのにスピー
ドを落とさない車や横断歩道で歩行者を優先し
ない車。中学生の私からすれば、大人達は
なぜごみをごみ箱に捨てられないのだろ
う、なぜ交通ルールを守れないのだろ
う、と思ってしまう。みんなが住むみんなのま
ちなのに、とても悲しいことだ。

とは言え、私が住む松川町は、あじさい
小路が有名で、その季節になると通学路の
植え込みには地域の方が手入れした色とり
どりのあじさいでいっぱいになる。そんな
中通学すると、地域の人とのあいさつも自
然と気持ちの良いものになる。この美しい
まちも、温かい地域の人たちも、私の自慢
だ。

私は考えた。当たり前ことができなく

なったから「市民憲章」が制定されたとい
うわけではない。福島市の良さをいつまで
も受け継ぎ、さらにより良いまちを目指し
ていこうとするみんなの願いが込められた
ものなのだと。希望にあふれたまちにして
いくために、福島市民憲章とは何か、もっ
とみんなに知ってほしい。そしてその意味
をもっとみんなに考えてほしい。

「平和で、住みよいまち」とは何だろう。
その土台はやはり、人として当たり前のこ
とが当たり前に行えることではないだろう
か。みんながその土台をしっかり持てば、
福島市はさらに素晴らしいまちになっ
ていくことだろう。私も、誰もが住みやすいま
ちになるよう、地域の自然も、周りの人た
ちも、大切にしていきたいと思う。

自然豊かな美しい福島市。温かく優しさ
あふれる福島市。これからも、いつまでも。

銀賞

「はじめの一步」

福島市立松陵中学校

佐藤 駿 太

松陵中学校の校歌の作曲者は、福島市の偉大な作曲家「古関裕而」です。今年七月二日に第二回ふくしん夢の音楽会が開催されました。その中で、古関裕而作曲の校歌披露として松陵中学校の出演が決まり、僕は初めて音楽堂で歌うことができる期待に胸をふくらませて参加しました。福島市にある素晴らしい音楽堂でみんなで楽しみながら精一杯歌った校歌、会場の皆様から受けた大きな拍手は、今でも心に残り、忘れられない思い出です。福島市が進める「古関裕而のまち・ふくしま」を全国へ発信していく応援活動に参加できたことを誇りに思っています。

偉大な作曲家「古関裕而」の豊かな感性と創造力を育んだ福島市。そして、今僕たちが住んでいる福島市。見えている光景は違うかもしれないけれど、緑に囲まれた信

夫山と美しい阿武隈川の自然の中で育った豊かな気持ちをもつ福島市民としての誇りを受け継いでいかなければならないと強く感じました。

私たちが住んでいる福島市には、「福島市民憲章」が定められています。その中でも僕は、「空も水もきれいなみどりのまち」を大切にしていきたいと思いました。空も水もきれいでなければ、植物は十分に育ちません。植物が育たない場所で、僕たち人間も健やかに育つことはできません。僕たちは、この福島市で大きく育ち、学び、古関裕而のような、発想力のある心豊かな人間になりたいと思っています。

今年の夏、僕は中学校の近くに流れている水原川へ友達と遊びに行きました。僕が通う中学校の周りは田園風景が広がり、いろいろな草花が咲き誇っています。特に夏には、街道沿いに植えられた紫陽花が満開に咲くので、本当にきれいな町並みです。水原川にはフナやアブラハヤが生息しており、水も透き通っていて、とてもきれいな川です。

しかし、そんな豊かで身近な川にも、ポ

リ袋等のごみが流れているのを発見しました。全世界で問題になっているプラスチックごみの問題が、僕の住んでいる地域の川にもあることを知り、非常に驚いたとともに、残念でなりませんでした。僕と友達はそのごみを川から拾って家に持ち帰り、ごみの日に分別して捨てました。

一つのごみを拾うことで、「きれいなまち」への第一歩が踏み出せるのではないかと思います。僕は、福島市民として、家の周りや道路、地域の川がきれいな環境で住み続けられるように、心がけていきたいです。そしてその「はじめの一步」が地域全体に広がり、街も人も心豊かに過ごせるよう、力を尽くしていきたいです。

今日も福島市のどこかで子どもたちの歌声が聞こえてくる。そんな「ふくしま」であることを祈っています。

銀賞

「安全で健康なまち」

福島市立松陵中学校

村松 美 苺

「子どもからおとしよりまで安全で健康なまちをつくりましょう。」これは、福島市民憲章の一つです。

私は生まれたときから一緒に住んでいる祖父母がいるので、この項目が一番気になりました。私にとってお年寄りの存在や話題は、とても身近であり、大事なことなのです。

昨年、元気だった祖父が倒れ、要介護五になりました。祖母も今まで普通にできていたことが少しずつできなくなっていることを感じるようになりました。年を重ねるごとに、思うように歩くことができず、階段も転びそうになり、目も見えにくくなり、私たちにとって当たり前前に行けることが、高齢者ではできなくなるのです。

どのようにしたら、高齢の方々が住みやすい「安全なまち」になっていくのでしょうか。

うか。私はバリアフリーについて調べました。それは、高齢者や身体障害者のため、また、妊婦やベビーカーを使う子供連れの方のための設備です。階段脇のスロープやエレベーター、点字ブロックなど、現在はさまざまな設備が普及してきています。

福島市では、県庁や市役所など、公共施設のバリアフリーは充実し、みんなが訪れやすいように作られています。しかし、それ以外の場所では、まだまだ階段や段差などがあり、困難なところも多いです。特に、古くからある商店や飲食店、道路などは、バリアフリーが進んでおらず、行くのを諦めてしまう場合もあります。道は広い方がいいし、段差も少ない方がいいと思います。みんなが暮らしやすい街を作っていくことが、福島市にとって「安全なまち」につながると思います。施設面だけではなく心の面のバリアフリーも大切です。少しずつ行っていけば、理想の街ができていくと思います。

祖父母は、「孫がいなかったら、毎日笑っていないかったかもしれない」とよく言います。近所の人も、私がいさつをするを嬉

しそうに声をかけてくれます。登下校を見守ってくださる方は、「子どもたちと毎日会えるから楽しい」と話しているそうです。私は、あいさつをしていただけなのに、知らないうちにみんなが元気になっていくことに気づきました。

「健康」とは、心の健康を指しているのではないかと思います。心の健康は、身体の健康にもつながるはずです。新型コロナウイルスの影響でなかなか難しいかもしれませんが、地域の人を孤立させないためのコミュニケーションが重要だと思います。福島市民として、お互いが意識して、周囲に目を向けることが必要です。小さな「気づき」が、もっと素晴らしい街作りになるのです。私はこれからも相手への優しい心配りを大切にしていきたいです。「安全で健康なまち」のために。

銀賞

「福島の恵みに恩返しを」

福島大学附属中学校

落合 向日葵

今年も桃の季節がやってきた。私の大好物は固くて甘い桃。口いっぱいにはお張ると、ジュワーっと広がる甘み。

梅雨が明ける頃からフルーツラインに県外のナンバーが増える。今年オープンした道の駅ふくしまはにぎわい、桃の箱を抱えた客でレジに長い列ができる。

空も水もきれいなみどりの町福島が育んだ自慢の桃だ。農家さんが心を込めて育てた桃を笑顔で買っていくのを見ると私もうれしくなる。

私の当たり前の日常にも豊かな自然があふれている。朝起きてカーテンを開けると、毎日表情が変わる吾妻山が見え、小富士が見えるとワクワクする。祖父母が畑で作った旬の野菜が彩る朝食。通学路はのどかな田畑を通り、十二年連続で水質日本一となった荒川を渡る。朝の登校は四季を体

いっぱい感じる大切な時間だ。

このみどり豊かな自然は福島市民の誇りだ。しかし、これからもずっと福島の豊かな自然を守るために、今取り組まなければいけない課題もある。それは、ゴミの排出量を減らす事だ。

福島のゴミ排出量（一人一日あたり）千三十三グラム、リサイクル率十三・二パーセントでどちらも全国ワースト二位と残念な結果だ。調べてみると、ゴミ全体のうち約八十パーセントが可燃ゴミだが、その中にリサイクルができる段ボールやペットボトルなどの資源物が混ざり込んでいるというのだ。一人一人が分別やゴミ収集のルールを守り、しっかりと分別してリサイクルに取り組むことが大切だ。

さらに、家庭から出る生ゴミがかなりの割合を占めていると分かった。生ゴミは約八十パーセントが水分なので、捨てる前にゴミをしぼり、水切りをするだけで量を減らすことができるのだ。どちらも意識してすぐに行動すれば確実にゴミを減らせるのが分かった。

また、食べられるのに廃棄される食品口

スも減らす必要がある。家族で夕食の時に話題になり冷蔵庫をチェックしてみると、食べ切れずに賞味期限切れになった調味料や食材があった。今後は買い物をする前に家の食材を確認して、まとめ買いをしないで使う分、食べられる分だけ購入しようと話し合った。

福島市民憲章は大切な事を教えてくれる。福島市の魅力や課題を知る事が行動を起こす第一歩だという事と、より良い福島市の未来のために、自分自身ができる事から始める事だ。限らない発展のためには、周りに伝える事も大切だろう。小さな事でも、市民一人一人が意識すれば大きな問題も解決できると思う。みんなと一緒に一歩ずつ前へ歩いていきたい。

銅賞

「みどりあふれる」

『フルーツライン』

福島市立信陵中学校

浅田 真宙

夏になると、家の周りは、ある虫の鳴き声でにぎやかになります。それは「セミ」です。家の近くには、フルーツラインが通っており、家の周りは、果樹に囲まれている、みどりあふれる地域です。昼間になると、セミの鳴き声でにぎやかになります。しかし、セミが多いということは、それほど果樹などのみどりがあふれているということ değildir。

しかし、小学六年生頃の私は、私が大人になったころには、果樹などのみどりが無くなってしまふのではという危機感を抱いていました。大きな原因は二つあります。一つ目は、少子高齢化です。私が住む大笹生は子供より高齢者が多く、小学生の数は百人未満でした。また、農家の多くが高齢者で、果樹を伐って、畑の面積を減らし

ているのをよく見かけます。私の祖父も、桃、梨、林檎それぞれの果樹を半分ずつ減らしました。

二つ目は、激しい気候変動です。気温の上昇や雹、霜です。今年の果物は、雹の被害がひどく、例年より収穫できた桃は少なかったようです。また、去年は、遅霜の被害にも合いました。

このまま行けば、離農者が増え、家の周りの果樹などのみどりが消え、セミの鳴き声を聞けなくなってしまうのでしょうか。

今年の春に、地域の人が、待ちに待ったふくしま道の駅がオープンしました。道の駅周辺には果物を売りにしたカフェがオープンし、大笹生がにぎわってきました。

農業の担い手を増やすことにつながるだろう変化が色々と起きています。例えば、梨の棚を上げることです。梨の棚が低いと、中腰で作業することが多く疲れやすくなります。しかし、梨の棚を上げることによって、中腰で作業することが無くなり疲れにくくなります。誰でも農業に取り組みやすくなると思います。

また、若い人が農家を継ぐと、全ての畑

に手が回らなくなり放置してしまう場合があるそうです。若い人に農家を継がせるだけでなく、相談できる環境を整えたり、人手不足を解消したりするのも大切だと思います。

私の将来の夢は、フルーツラインを果樹などのみどりいっぱいにして、春には、それぞれの果実の花を楽しんでもらい、夏には、次々と実る果実を味わえるみどりの町大笹生や、福島の魅力在海外の人にも知ってもらうことです。

銅賞

「『思い』を『行動』へ」

福島大学附属中学校

大原 詩子

玄関を出ると、私の家からは吾妻山が見える。四季と共に移りゆく吾妻山の姿は本当に美しい。とりわけ、早春の吾妻小富士に現れる「雪うさぎ」を見ると、春が来たことを実感でき、心までうきうきしてくる。鼻に入る空気はまだ冷たいが、春の優しい匂いを体中で感じる事が出来る、至福の瞬間だ。

南に向かう新幹線が見えた。

(東京では、こんな風に春を感じることは出来ないだろうな。)

福島市民としての誇らしさを感じながらも、やはり日々の生活の中では、改善すべき点も見えてくる。その一つが「ゴミ問題」だ。

福島市のゴミ問題は深刻である。一家庭あたりのゴミ排出量は、全国ワースト十位に入る勢いだ。ゴミの増加が、環境破壊に

繋がることはもとより、巡り巡って市民である自分たちの首をしめることにもなりかねないことを、小学校の総合学習で学んだ。我が家でもゴミを減らす努力を続けている。リサイクルできるものの分別、河川を汚さないようにする工夫など、意外と大変なことも多いことに気がついた。だからといって、手をこまねいている訳にはいかない。

「自転車を漕ぎ出す時に、一番力を入れるのは漕ぎ出す時だよ。」

以前、父が話した言葉を思い出した。物事を始めるときは気が重く、面倒に思ったとしても、一度始めてしまえば意外と出来てしまうことなのかもしれない。

福島市民憲章は、五つの項目から成り立っており、いずれも「くままちをつくりましょう。」という文言で締めくくられている。

誰もが、福島市民であることを誇りに思い、自慢できる街にしたいと願っていることだろう。

しかし、その「思い」を実現させるためには、市民である私たち一人ひとりの意識

と、実現にむけて「行動」に移すことが何より重要ではないだろうか。

行動をおこすことは、決してたやすい事ではない。それはゴミ問題だけでなく、交通ルールや、地域との関わりなどでも言えることだ。面倒なことを言い訳にして、行動に移さず、理想を掲げるだけで済ませてしまうのはいかなものだろう。

夏休み中、福島駅で多くの観光客が、たくさんのお土産を手に行っている姿を目にした。名産の果物や、お菓子を楽しそうに選ぶ姿に、自分が福島市民であることを誇らしく、嬉しく感じたほどだ。

中学生の私が出来るとは、微々たるものかもしれないが、まずは「最初の『漕ぎ』」をしてみよう。ふるさとである福島市が、未来も自慢できる、素晴らしい街であるように。

銅賞

「世界の環境のために」

福島から出来ること」

福島大学附属中学校

北山 悠真

福島市は自然の美しい街である。その街で暮らしの心配がなく学校に行ける。それが僕の「当たり前」だった。あの話を聞くまでは。

その日、僕は学校で講話を聞いた。キリバスに帰化したケンタロ・オノさんの講話である。キリバスは地球温暖化の影響を最も受けている国のひとつである。例を挙げると「二〇五〇年には首都タラワの二十五％～八十％がなくなる可能性がある。」「海温が上がって珊瑚が死ぬと魚が取れなくなってしまう。」等々だ。キリバスの子供達が無邪気に笑う写真を前にオノさんの「もうすぐこの国がなくなっちゃうんだよ、ってこの子達に言える？」という言葉が僕の心に残った。当たり前前の日常を送れるはずの子供が国土がなくなる危機、命

の危機にさらされている。これを遠い国の話にしてはいけない。キリバスや世界の海、自然を守るために、自分にできることを福島から行動したい。僕は心に誓った。

福島の温暖化への取り組みを調べるうちに「福島市民憲章」を知った。福島市民憲章とは「自然に恵まれた住みよく豊かな福島市を築くため、市民が積極的に努力を続けていくことを希望したもの」だ。海に落ちたゴミは海流に乗ってキリバスの砂浜へ打ち上げられる。つまり、別の国でゴミを放置したことでキリバス人の生活が危険にさらされるのだ。福島市には太平洋に通じる阿武隈川が流れている。ポイ捨てしたゴミは風に吹かれ、川に入り、やがて海へと流されてしまう。それを防ぐため、福島市民憲章の「空も水もきれいなみどりのまち」を実現する必要があるのではないだろうか。だが課題は山のようにある。大きな一つとして、先に挙げた「ゴミ問題」だ。まずは、街へのポイ捨てを僕達が決してしないこと。クリーン作戦を行うと共に、街の中でゴミを見たらすぐに拾うという意識を市民全体で持つことが必要である。また、

福島市は全国でゴミ排出量過去最高を記録したこともある。福島ごみ減量化目標のゴミ排出量八百九十グラムも令和二年度の時点で達成できていない。ごみ減量化目標を達成する方法として、「ごみ減量大作戦」がある。この施策を「知り・実行し」、ごみ減量に繋がっているのか「見直し」、できることを「続ける」。この流れを一人一人が意識すれば、ゴミを減らすことができ、CO₂の排出を抑えることにつながり、「空も水もきれいなみどりのまち」を作ることができるのではないだろうか。そして、僕達の努力が温暖化で苦しむ遠い国々の人達の暮らしを守ることもつながるのではないだろうか。

自分の住む街を守ることは、世界の美しい海や自然、国土、人々、そして未来を守ることにつながると僕は信じている。これからも僕なりにアクションを続けていきたい。

佳作

「福島リベンジャーズ」

福島市立信陵中学校

菅野 公大

福島県のごみの排出量は、現在二年連続ワースト二位と残念な結果になっている。

そこで僕には目標ができた。福島県をワースト二位から、ナンバーワンにさせることだ。福島県を「福島はごみの排出量が多い県」から、「福島はごみの排出量が多くなく、空も水もきれいな緑が多い県」という印象にしたいと強く思った。そこで、まずは僕たちが住む福島市から取り組みを広げていきたいと考えた。

母の会社は、福島市が主催する、「ふくしまきれいにし隊」の活動に参加している。母が言うには、たばこの吸い殻やペットボトル、空き缶が多いらしい。しかも、短時間で四五十リットルのごみ袋が満タンになると聞いて、驚きをかくせなかった。

現在は、「ふくしまきれいにし隊」の社会人が、ボランティアでごみを拾っている。

さらに沢山のごみを拾うためには、人数を増やす必要がある。そこで僕は思いついた。小学校、中学校、高校、大学の学生たちに協力してもらってはよいのではないかと。

学生の活動名は「福島リベンジャーズ」としたい。活動内容としては、ゲーム形式で楽しくごみを拾う。制限時間内にどのくらいのごみを拾えるかを競って、多く拾うことができた上位のチームが、景品をもらえる。景品は税金がかからないもので、ごみを減らせるエコなものがいいと考えた。例えば、出荷できなくて捨ててしまう農作物だ。傷があっても味は変わらず美味しくいからだ。

また、福島にゆかりのある有名人と会うことができたりする企画もいいと思った。僕だったら、ディーン・フジオカさんや、梅沢富美男さんに会ってみたい。福島で歩いてごみ拾いの旅をしている「ブンケン」さんとのコラボ企画もしてみたい。

この活動だけでは、ごみは減らない。家庭から排出されるごみの量が変わらないからだ。そこで、リデュース、リユース、リサイクルのスリーアールにも力を入れる。

コマースシャルを放送したり、ポスターを貼ることで、このことを広めていきたい。スリーアールを身近に感じてもらうことで、ごみの減少やエスディージーズにつながる。

僕が考えた「福島リベンジャーズ」が現実化され、スリーアールに積極的に取り組めば、ごみを減らせる。そして、ワーストからベストに逆転し、福島市をもっときれいにしていきたい。

佳作

「優しさが溢れるまち」

福島市立信陵中学校

小島千佳

私の周りは様々な人の優しさで溢れている。今回、この福島市民憲章について考えていたとき、ふと思いついたことがあった。

それは私が小学生の時のことだ。私達の地域は、夏休みになると毎朝近くの公園でラジオ体操をしていた。その頃は、公園の雑草が抜かれ、きれいに整備されていたことに気づかなかった。

新型コロナウイルスが流行し始め、夏休みの恒例行事だった毎朝のラジオ体操は中止になった。

ある日、私が友達と近くの公園に遊びに行ったときのことだ。その公園は夏休みになると毎朝ラジオ体操が行われていた、あの公園だ。

私はその時、初めて気づいた。公園は私のおじいちゃんの手によってきれいに保たれていたということに。

帽子を被り、首にはタオルを巻き、手には軍手をして一生懸命草むしりをしている姿を見ていつもは少し厳しいおじいちゃんだったけど、優しく思いやりのあるおじいちゃんだと気づくことができた。

そして冬になると雪が降り、通学路にも道路にも雪が積もる。そんな中、地域の人たちは朝の七時過ぎにも関わらず雪かきをして私たちが歩きやすいようにと、道をつくってくれていた。そして寒くて大変なはずなのに、地域の人たちは笑顔で、

「おはよう。滑るから気をつけてね。」
とあいさつをしてくれた。そして私は、

「おはようございます。」

と笑顔で返し、小学校へ向かった。体は寒くても、心は温かい気持ちでいっぱいになった気がした。

冬休みになって、時間に余裕ができると家族みんなで雪かきをした。

雪はどっしりと重く、運ぶのは大変だった。

中には雪が溶けて凍ってしまい、固い氷になっているものもあり、鉄のスcoopで氷を割って運ぶときもあった。

一生懸命雪かきをしていると、近所の方々も外に出てきて、

「おー千佳ちゃん。雪かきしてくれてありがとう。」

と明るく笑顔で言ってくれた。そして私は、「いえいえ。いつもありがとうございます。」

と笑顔で返した。

近所の方々と協力して雪かきを終わると、道路は通りやすくなった。そして家に帰ってこたつに入ると、身も心も温かくなった気がした。

このように、普段の何げない日常にはたくさんの人の優しさで溢れている。

私も人から人へ、思いやりの気持ちをつないで福島市民憲章の一つのテーマである「親切で愛情あふれるまち」の実現に向けて「思いやりバトン」をつなげて行きたい。

佳作

「みんなで支え合う福島」

福島市立信陵中学校

遠藤 愛結

私の地域には、登下校を見守ってくれるボランティアの方々がいる。そのほとんどがお年寄りだ。私が小学生だった頃、登下校の際に横断歩道に立って、

「おはよう」「おかえり」

と声をかけてくれていた。暑い日も寒い日も、毎日変わらず続けてくれた。毎日、顔を合わせるので横断歩道の赤信号の時には、おしゃべりをしたり笑わせてくれたりしていた。危ない時には注意をしてくれ、交通ルールを教えてくれた。ちよつとした時間だったが、ほつとする時間でもあった。何となく安心することもできた。小学校は、学年によって下校する時間が違う。しかし、その時間に合わせて、わざわざ出て来てくれていた。毎日毎日、大変だったと思う。本当は、もつと感謝するべきだった。

雪の日には、私達が歩きやすいように除

雪をしてくれる地域の方がいる。

「ここ除雪したから、こつち歩きな。」

と声をかけてもらったことがあった。お陰で靴がびしょぬれにならずにすんだこともあった。自分の家の前だけではなく、他人の事を考えて行動してくれている。

他にも、登校する時間の前に早起きして、道路の犬のフンを拾ってくれている人もいると母から聞いた。私達が朝から嫌な思いをしないようにと考えてくれているそう。ありがたいなと思った。下校が遅くなった時には、途中まで送ってくれたので怖い思いをせずにすんだ。たくさん支えてもらっていたのだ。私達の周りには、親切な近所の方々がたくさんいる。普通に毎日学校に通えることは、周りの方々の愛情あふれる行動があったからなのだ。今になって気付いた。

では、今の私達に何が出来るのだろうか。本当なら、運動会やウォークラリー、バザーや祭りなどのイベントを地域の方々と行うはずだった。しかし、ここ数年コロナ禍でコミュニケーションをとる機会が少なくなってしまった。一緒に何かをやる楽し

みが無いのは、とても残念である。しかし、いつかコロナが終息した時には、お年寄りに声をかけてみようと思う。そして、私達を見守り続け支えてくれたことへの感謝を伝えたい。

一人一人が優しい気持ちで他人の事を考え「ありがとう」と言える街作りを目指すことが福島市民憲章につながると思う。支えてもらったことを忘れずに、私もいつか優しい気持ちで地域に恩返しをしたい。

佳作

「少しのきっかけ」

福島市立信陵中学校

八代 嘉大

ある日、部活後で疲れきっていた僕は、少し前のプレーのことなんかを考えながら、自転車でもいつものルートを走っていた。すると突然、カーブミラーに車の影が見えた。とっさに自分も車の運転手の人にもブレーキを入れ、衝突はまぬがれた。カーブミラーを見る癖をつけて良かった、と思いつつながら運転手の人に小さく何度か頭を下げて、そそくさとその場から去った。

それから二三日ほどたったある日、親から、

「いつもフラフラ走ってて危ない。疲れているのは分かるけれど、もう少し気を付けなさい。」

と言われた。その時は、「どこで見てるんだよ」などと思いつつながら、

「わかったわかった。お風呂借りるよ。」などと適当に返事をして、すぐに脱衣所の

扉を閉めた。

しかし、髪を洗っている途中で二日ほど前の衝突回避のことを思い出した。「ちゃんと走れてなかったのか…」と思うと、少し怖くなった。最近でもそのような事故は少なくないらしい。「福島市信陵地区 自転車と自動車衝突 少年(13)死亡」のニュースを想像すると、背筋が凍り、本格的に怖くなった。

その次の日の部活後、自転車にしばらく乗っていると、本当にフラフラし始めて、少し苦笑いしてしまった。そういえば、と、ポーツと走って車と近づいてしまった時や、自転車友達に、「フラフラだな。」と笑われてしまった時のことも思い出した。仕方がないじゃないか！僕は卓球部で、大会が近いので練習が少しハードなんだ。ヘトヘトになるまで練習するのは間違っちゃいないはずだ！と、一人で頭の中で論争しながら、この日はゆっくと帰った。

さて、あの時はあんな言い方(考え方)をしたが、スピードを少しおさえて走るだけだ。いづいぶマシになるものだ。いつも通り家につき、シャワーをあびて、宿題でもや

るか課題表をのぞきこんだ。すると、「福島市民憲章作文」の文が目に入った。そういえば、とそれを見直してみたら、今までの出来事が、「子どもからおとしよりまで安全で健康なまち」をつくるための一つだったということに気付いた。なるほどな、と思い、こうして書き留めてみた。一人一人が少しのきっかけをえるだけで、このまちはもつとよくなれるのかもしれない。

佳作

「僕の最強福島水」

福島市立信陵中学校

高橋 友貴

僕は七月、福島市の北部にある摺上川ダムから流れ出る摺上川にもぐった。

「いた。いた。いたぞー。川虫・イワナ・ウグイ今日もいるぞー。やっぱり摺上川はきれいだな。」

と僕は大興奮してしまった。イワナがいるということは川の水が綺麗な証拠だ。僕は毎年夏になると祖父に頼み、この場所に何度も来る。

摺上川ダムと言えば、福島市民の飲用水だ。僕は小さいころから、何も考えずに水道の水を飲んでいた。当たり前なことだと思っていたから。でも弁天山から花見山までの長いハイキングでくたくたになり、花見山の下にあった特設水飲み場で水を飲んだ時、

「あー。うめー。」

とどこのおいしい水なのかと確認した。そ

れは、福島市の水道水をピーアールするための場所だった。福島の水はモンドセレクションで六年連続金賞以上を受賞していることを知った。それから僕は水道水に興味を持つようになった。母に、

「水道水は摺上川ダムの水って知っていたけど、世界に認められたり、ペットボトルとなって売ってるなんてなんだか信じられないよね。」

と言った。すると母が、

「福島の水すごいよね。母さんの子供のころ摺上川ダムの工事をしていたんだけど。近所にダムの底に家がしずんでしまう人たちが引越してきて、もにわ団地ができたり、クラスに転校生がきたりしたよ。」と言った。僕は、自分の学校がダムになるから転校してくれと言われたら絶対いやだ。だからぎせいになってくれた人達の気持ちを考えて感謝しなければならぬと思う。

子供のころもにわによく遊びに行っていた祖父に聞いた。昔のにもにわは魚の数も多く、うなぎもとったとじまん氣にいつも言う。ダムには、名号・梨平・鉾ぶり部落が

しずんでしまったと聞いた。

もにわに遊びに行くとサルやイノシシのフンがたくさん落ちていて。それを見ると、たくさんの木がばっさいされすみ家や食べ物失われた事が想像できる。ぎせいになつたのは人間だけではないことが分かった。

小さいころから、「水や緑を大切に」「ポイ捨てはしない」と何度も聞いた言葉だったが、この事で改めて考えた。僕の毎日の大事な生活の水と、毎年夏の楽しみにもにわの川遊びのための水。摺上川ダムを守っていくために、自然を大切に野生動物とも共存できるように、まず、水道の水はこまめに止め、ごみを増やさないことから心がけようと思う。

佳作

「福島市の空」

福島市立西信中学校

影山 凜緒

「福島市の空は綺麗だね。」東京に住む私の従兄妹は、福島市に来たときにそう言いました。その時の私は、空はどこにでもあるのに、なぜ福島市の空をほめるのかわかりませんでした。

私は、福島市で生まれ育ち、小さい頃から空が好きだった私はたくさん空を見てきました。私にとっては福島市の空が当たり前前の空となっているのです。従兄妹は東京で生まれましたが、両親の仕事の都合で、五年間福島市で生活をしていました。その後、また東京に戻りましたが、従兄妹は今でも「福島の方がいい。」と、口にしていません。「智恵子抄」の詩にある、「東京には空がない」という言葉のとおりとも言っています。

また、従兄妹は、「福島は星がとても綺麗で、空気が澄んでいるから、気持ちよく

過ごせる。」と、会うたびに言ってくれます。私はその時、うれしかったのと同時に、「この福島市の環境を守っていききたいな。」と、強く思いました。

福島市は空気が綺麗なだけでなく、荒川は十二年連続で全国一位となるなど、とても綺麗な市です。荒川は周辺のゴミ拾いや清掃を毎年行っており、綺麗な川を維持しています。さらに、環境保全と同時に、荒川流域の魅力づくりにつながる活動にも取り組んでいます。荒川がいつ見ても綺麗なのは、このような人たちの努力のおかげだと思います。

しかし、これからも綺麗な福島市であり続けるには、小さなことからでも積極的に実行に移さなければならぬと改めて思います。例えば、地域のクリーン活動に進んで参加したり、自分で出したゴミは自分で持ち帰るなどの基本的なことは、意識をすれば誰にでもできることです。

福島市はゴミ排出量が、全国ワースト十一位です。一人、一日あたりのゴミ排出量は、約千七百グラムで、全国平均の約一・二倍もあります。そして、一人、一日あた

りのゴミ処理経費は、約一万四千円もかかっています。そして、ゴミ排出量の中で最も多いのは生活系ゴミと可燃ゴミです。その中で多いのは、生ゴミと紙類です。

私は、不要な紙を捨てることが多いので、裏紙をメモ帳代わりにするなど、紙を無駄にすることがないように心がけています。他にも、着古した服をすぐには捨てず、台所の汚れ取りに再利用するといった取り組みも行っています。

福島市は自然がとても豊かな所です。そして、その自然は住んでいる私たちが守っていかなければなりません。一人一人が意識をもち、自然に優しい行動ができるような地域でありたいと思います。「空も水もきれいなみどりのまち」と言えば「福島市」と言えるように小さなことから始めていきたいです。

佳作

「進化し続ける

福島のおふれる魅力」

福島市立西信中学校

村上 莉心

私の住んでいる西信地区は、あづま総合運動公園や四季の里、アンナガーデンなど四季それぞれに自然を感じることができるところです。小学校の時に福島市に引っ越してきて、海もなく、熊やタヌキが出ることに驚いたことを今でも覚えています。

私の祖父母や母は写真を撮ることが好きで、福島市のいろいろな場所に私を連れて行ってくれました。イチヨウ並木での、顔をしかめるほどのおいや、土湯へ向かう車内では、どこまで登るのか心配し、雲が自分たちよりも下に見えた景色に怯えてしまったことは忘れられません。

今年になって、母が花屋に勤め始めたこともあり、季節の植物や花、自然の景色に私も興味をもち始めました。

まず、行ったのは、花見山でのお花見で

す。初めて見ましたが、色とりどりの花があり、とても感動しました。次に、飯坂の花ももの里です。花ももは鮮やかで菜の花とのコントラストがとてもきれいでした。「春だけでも福島市の自然はすごいな。」と思った私は、福島県のホームページで「花回廊」というものがあることを知りました。「ふくしま花回廊スポット」心が動く美しいをめぐる小さな旅」というキャッチフレーズにも魅力を感じました。

小さなころには全く感じなかった、「心が動く美しさ」を自分自身が楽しめるようになり、コロナ禍での先の見えない状況の中でも、私たちが住む、この福島市の中に、空気がきれいで自然そのものにこんなにも楽しめる場所があることに、とてもうれしく感じました。

先日は、「花回廊」を参考にして行った、大波城跡のたくさんのひまわりを見てきました。道をすれ違う家族やペットの子犬とも、あいさつを交わしたり、遊んだりできるのも、自然がもつ力や、きれいなものを見た満足感のおかげで「私自身の心も優しくなっているのかなあ。」と感じました。

私たちが大人になるころには、現在のコロナ禍や、自然環境の破壊がどのような状況になっているのか、今の私にはとても予想が付きません。

先日新しく、大きな、「道の駅ふくしま」を訪れました。おしゃれなロゴが目立つ野菜も売っていたので、気になり調べてみるとバーベキュー用の野菜を販売しているなど、キャンプブームの今、若い人たちにも響くものを売っており、農業の進化を感じました。このように農業に限らず、福島市はこれからも変化したり、進化したりしていくことと思います。これからの福島市が成長することに可能となる、福島市民としての楽しみ方を味わっていききたいです。

佳作

「親切は人を笑顔にする」

福島市立松陵中学校

丹野 晃成

僕は、子どもやお年寄り、友達など、たくさんの人が互いに親切にできる福島市を作っていききたいです。そう思うようになったきっかけは、周りの友達や祖父母との関わりからでした。

僕は中学生になってから、友達の悩みを聞くのが多くなりました。友達と一緒に下校する時、休み時間に一緒に過ごす時、友達は家族や級友のことについて、いろいろ話してくれました。僕も同じように思ったことがあるので、友達の言っていることはよくわかります。僕がその解決策などを提案すると、友達は「ありがとう」とうれしそうに笑顔で言ってくれます。そんな時、僕は改めて「話を聞いて良かったな。」と心から思います。僕は話を聞いてあげただけなのに、友達も僕も、とても心が温かくなりました。人に親切にすることは、みんな

なが幸せな気分になることだと実感しました。

「親切なまち」について考えるようになったもう一つのきっかけは、祖母との関わりからです。僕の祖母は、よく何かを忘れて勝手に行動してしまうことがあります。僕はその時優しく、「そうじゃないよ。」「こうするんだよ。」などと、声をかけをすることがあります。以前、小学校の時に、学校の授業で、「認知症サポート講座」があり、認知症の方への接し方やサポートの仕方について学びました。強く叱ったり否定したりするのはなく、受容的な態度で認めたり不安を取り除いたりすることが大事だと聞きました。そのおかげで、以前よりも優しく祖母に対応できるようになりました。祖母も、僕と話をしている時や、一緒に何かをしている時などは、楽しそうに笑ってくれます。僕はますます、祖母が安心して心地よく過ごせるように優しく接していきたいと思うようになりました。

これらの出来事を踏まえて、僕が考えたのは、「親切は人を笑顔にする」ということです。それは、子どもでも大人でも同じ

です。思いやりの気持ちを持って相手に優しく親切にすれば、相手も自分も笑顔になり、幸せの輪が広がっていきます。

身近な人ばかりではありません。実際に、見知らぬ通行人の方に「こんにちは」とあいさつしたり会釈をしたりすることでも、相手の方は会釈をしたり「お帰り」と言葉を返してくれたりします。そこには温かい雰囲気があります。

福島市民憲章には、「親切で愛情あふれるまち」という言葉があります。みんなが優しく親切になれば、笑顔あふれる幸せなまちになることでしょう。

僕はこれからも、家族や友達、地域の方、他人、子どもからお年寄りまで、さまざまな人に、いつも優しい態度で、親切にしていきたいです。福島市民の一人として。

佳作

「みどりのまちを受けつぐために」

福島市立信夫中学校

鈴木 ひまり

私は初めて「福島市民憲章」を知りました。五つの内容で特に気になったものは、「空も水もきれいなみどりのまち」です。

私の住んでいる地域は、自然豊かで、四季折々の美しい景色を楽しむことができます。

私が小学生のときには、地域で植栽活動というものがあり、地域の方々に教えてもらいながら、チューリップをたくさん植えました。春になると、自分たちで植えた花がきれいに咲き、私たちもこの地域の自然を豊かにする活動に参加しているんだと改めて実感することができました。またその咲いた花を見て、

「きれいだね。」

と、つぶやいていた人を見かけて、すごくうれしい気持ちになりました。

去年の夏休みには、家族と一緒にホタル

を見ることができた川に初めて行きました。私は、きれいな川にしかすまないホタルをこんなに近くで見れることに驚きました。そしてこの場所はすごく環境がきれいなんだらうなと思いました。

そこで、四季折々の美しい景色を見ることができたり、きれいな川にしか生息しないホタルを見ることができたりする自然がいつも保たれているのはなぜだろうという疑問を持ちました。家族に聞いてみると、「地域の人達が整備してくれているんだよ。」

と教えてくれました。私は、このことを知って、当たり前のように毎日見ていた美しい景色は、私たちが知らないところで地域の人々によって守られていたんだと感じ、地域の方々に感謝の気持ちでいっぱいになりました。そして、地域の方々に頼るだけでなく、もっと私たちにも、この自然を守る活動に参加できないかと考えました。

そこで、思いついたのは、道ばたに捨てられているごみのことです。学校の登下校のときに、ポイ捨てされているごみをよく見かけます。いつもは、見て見ぬふりをし

ていましたが、このごみが地域の美しい環境を壊してしまっているのではないかと思いました。だから、次にごみを見つけたときは、見て見ぬふりをしないようにしたいと思いました。また、家の庭などにも花を植えて大切に育て、地域をもっとあざやかにしていきたいです。

地域の方々が、今まで大切に育ててきてくださった美しいみどりのまちを、次は私たちが受けつぎ、よりよい環境にするために、他人事と思わず、自分たちにできることを探し積極的に取り組んでいきたいと思いました。そして、このまちの一員として責任をもって行動し、これからも自分たちの住む地域の美しい自然を守っていききたいです。

佳作

「明るい福島市へ」

福島大学附属中学校

矢部 くるみ

小学校の時から私の一日はあいさつで始まる。家族とのあいさつ、登校時に見守りをしていての人とのあいさつ、先生や先輩、友達とのあいさつ。あいさつで始まると、一日中明るい気持ちで過ごすことができる。こんな福島市がとても好きだ。

一日にどのくらいあいさつをしているのかと考えると、数えきれないほどのたくさんの人とあいさつをしていることが分かった。あいさつをするとほとんどの人が返してくれるので、あいさつをした方もされた方もとてもうれしい気持ちになれると思う。また、あいさつは友達をつくることにも繋がると考えた。あいさつがきっかけで友達と話したり、話したことのない人とも話すきっかけになったりすることができ

る。しかし、私もあいさつを忘れてしまうこ

とや相手に聞こえないことがある。言っているつもりでも相手に聞こえないと意味がない。そのため、あいさつをするときは大きな声で伝える必要がある。また、近年は新型コロナウイルスの影響でマスクをつけて生活することが多くなり、より声が相手に届きにくくなってしまった。表情も見えにくい生活で、四月に入学した私たちはお互いの顔もあまりよく知らない。より声が届きにくい生活で顔も見えない生活の中、あいさつが大切だと改めて実感した。あいさつはコミュニケーションをとるための手段だと思う。また、私はあまり人とコミュニケーションをとるのが得意ではない。だからより一層あいさつは大切だ。

福島市民憲章には「親切で愛情あふれるまちをつくりましょう。」とある。私はこの市民憲章をみて、福島市民は守れていると思った一方、新型コロナウイルスの影響で変わってしまったところもあると思った。もつとよりよい福島市にするために福島市民憲章はとても大切だと思う。その福島市民憲章にもある愛情は、あいさつで十分に伝えられる。また、新型コロナウイルス

スの影響であたり前だと思っていた事も、実はすぐにこわれてしまうことを知った。だから、どんな世の中でもあいさつは大切だと思う。これからもあいさつをして「親切で愛情あふれるまち」をつくっていきたいと思う。

佳作

「蝶から考える福島市の自然」

福島大学附属中学校

守谷史佳

「空も水もきれいなみどりのまちをつくりましょう。」福島市民憲章の始めにある言葉に福島市民であることの喜びと安心を覚えた。

私は昆虫採集が大好きで、信夫山や荒川、十六沼や千貫森など市内の様々な公園に遊びに行っている。どの場所にもきれいな蝶が飛んでいて、眼下には美しい里山の風景や、自然と調和した街なみをながめることができる。

よく蝶は自然を守るバロメーターといわれている。短い命で食草も限られていて、環境の変化に敏感だ。私が遊びに行く所で生きている蝶たちは、その今の環境でしか生きることができない。今ある環境バランスがくずれてしまったら、この蝶たちは住む場所を失ってしまうのだ。昆虫採集に行くとき、いつも眼下に広々と美しい景色をな

がめながら、この環境があるから蝶が生きられるのだと強く感じる。

私のながめている美しい里山の風景は自然に作られたものではない。草原の草刈りや火入れ、雑木林の下刈りや間伐など、そこに住む人々が、その土地を守り暮らしてきた歴史であり文化なのだと思う。しかし、その美しい里山の風景も、少子高齢化にともなう過疎による人手不足や、都市化の進行や地球温暖化にともなう気候変動により、以前の姿とは少しずつ変わっていく。蝶の生態から見ても、十年前にいた種が今はその地域から姿を消してしまったという話はめずらしくはない。蝶が住みやすい環境とは、すなわち生き物にとって住みやすい環境といえる。それが短い期間で失われていることに、私は危機感を強く持っている。

今まで環境問題について、それがどのようにに自分の生活に影響があるのか考えてもみなかったが、昆虫採集を通して身の周りの環境について知り、興味を持つことができた。

福島市にはまだまだ多くの種の蝶が飛び

かう、美しい自然環境がある。環境を保全するには、その環境がそもそもどのような姿だったのかを知ることが大切だと言われている。私は昔の福島市の姿は知らないけれど、今ある福島市の自然を知ることができる。私たち、今、福島市に暮らすみんなが、私たちの身の周りの環境に興味を持ち現状を知れば、今ある福島市の美しい自然を未来に残すことができると思う。

空も水もきれいなまちは、蝶にとっても私たちにとっても住みやすい環境である。みんなで力を合わせて地域の自然に愛情をそそぎ、美しく住みやすい環境を守り、次の時代へ引き継いでいくことが私達の大切な役割だと美しく舞う蝶の姿から強く感じた。

佳作

「いつも見ている風景」

福島成蹊中学校

桑島 杏花

私は福島市の隣の伊達市に住んでいる。伊達市の人口は約五万七千人、福島市の人口は約二十八万人と、約五倍の差があり、通学の途中でも通勤ラッシュにイライラしたり、小中高校生の人数の多さに驚いたりしている。過疎化の進む山あいの町の住人としては、人の多さはある意味ストレスだとすら思った。

しかし、少し慣れて来た頃、通勤ラッシュで止まっている車窓から外を眺めていると、小学校付近の横断歩道に見守り隊の方々がそれぞれ決まった位置に付いて小学生の安全を守っているのを見掛けるようになった。雨の日であろうと、風の強い日であろうと、暑い日であろうと、見守り隊の方々は毎日同じ場所で小学生に明るく優しく声をかけていた。

見守り隊の方々だって、朝は忙しく、時

には用事があったり、体調を崩してしまう事だってあるだろう。それでも登校する子ども達がいる限り、毎日同じ場所で子ども達の安全に気を配っているのだ。

小中学生の数も多く、交通量の多い道路だという事もあるが、それにしても完璧な布陣だと思ってしまった。徒歩で通学する学生はどんなに安心だろう。

私は毎日この心温まる光景を見るのが日課となっている。

そして同時に気付いたことがある。それは、車を運転する方も皆とても優しいということだ。朝の忙しい中、横断歩道に人が止まっていると、気付いた人は皆、車を止めてくれる。母は、

「横断歩道があってもなくても、歩行者優先は道路交通法で決められてるでしょ。」と当然のように言うが、私の住む町は福島市ほどルールを守れている人がいないような気がする。友達の家遊びに行った帰りに横断歩道で止まって車が何台も通り過ぎて行くのを待った記憶しかない。

このように福島市という地域は、人口が多い場所にもかかわらず、いや、人口が多

い場所だからこそ、一人一人がきちんとルールを守り、互いに助け合いながら日々を過ごしているのだと思った。何気ない普段の生活の中にたくさんの親切で愛情あふれる行動を知り、私も周りの人に親切にしてみただけでなく、優しさを他の人へつないでいきたい。こういった一人一人の小さいけれど愛情あふれる行動が福島市民憲章の一つである「親切で愛情あふれるまちをつくりましょう。」を実現しているのではないだろうか。

佳作

「福島市民憲章が

気づかせてくれたこと」

福島成蹊中学校

猿田 慧

祖母が突然腰が痛いと言い出して、十ヶ月ほどたちました。

「今まで体験したことのない痛みだ。」
と言いつ、その日から起き上がることも大変
そうで、歩くことも嫌がりました。それま
で祖母は持病はありましたが、身の回りの
ことは自分でしていましたし、私の話し相
手になってくれることもありました。です
から、その急な変化に家族みんな驚いてし
まいました。

病院での検査では神経痛だとの診断で、
薬も処方されましたが、痛みはなかなか引
きませんでした。困り果てて連絡したところ
が市役所でした。

市の担当者は、すぐに「ケアワーカー」
の方を派遣してくださいました。ケアワー
カーさんは、祖母と私たち家族に丁寧に関

き取りをし、今必要なことや、できること
を提示してくださいました。そして、間も
なく祖母は要介護認定を受け、デイサービ
スに通うことができるようになったので
す。デイサービスでは、入浴や体操ができ
たり、他の人との交流もあります。痛みが
始めてから、一日ベッドの上で過ごすこと
の多かった祖母ですが、デイサービスのお
かげで、充実した一日を過ごすことができ
るようになりました。一時はどうなるか、
家族みんな心配しましたが、今は落ち着い
て生活できています。

福島市民憲章のことは、正直知りません
でした。今回機会があり内容を知ったので
すが、一番印象に残ったことが「子どもや
おとしよりをいたわり、親切にしましよ
う。」でした。デイサービスのスタッフの
方に会ったことがあります。祖母のペー
スに合わせて、優しく接してくださいいま
す。そして、デイサービスから帰ってくる
祖母は、いつも、出かける前よりも元気な
様子です。適切な対応をして頂いているお
かげだと思います。

自宅にいるときは、父や叔父が中心と

なって祖母の世話をしています。二人とも
祖母の話をきちんと聞き、できるだけ寄り
そおうとしています。しかし私は、祖母が
痛いと言うようになってから、どのように
関わってあげればいいのか分からなくなつて
しまい、たまにしか話さなくなつてしま
いました。この市民憲章を見て、私は今ま
での行いを反省しました。これからは、身
近なところから、福島市民として取りくみ、
福島市を良くしていこうと思いました。
さらに、福島市民憲章の他の目標も、で
きる所から挑戦したいです。

【一般の部】

目次

◇金賞

後世へ伝えたいもの

ペンネーム

いおり……………1

◇銀賞

図書館から発信する福島市の魅力

ペンネーム

あかしおなすび……………2

つなげる温かさ

浅野真実……………3

◇銅賞

伝えたい わたしたちのまち

ペンネーム

焼きサバ塩定食……………4

自然に包まれる温かい福島市

ペンネーム

南あゆは……………5

伝えたい創りたい私達のまち

佐藤正幸……………6

金賞

「後世へ伝えたいもの」

ペンネーム

い お り

「熱い、ギブアップや。疲れがとれるどころか、熱過ぎて体がこわばって肩がこるわ。」

そう言い、飯坂の共同浴場を後にしたあの日から、早十五年の月日が経った。

関西の方から福島市に嫁いだ二十六歳の私は、ここで新たな家庭を築くのだという希望とは裏腹に、福島という土地に馴染めず、居心地の悪さを抱えながら、新婚生活を送っていた。

それはまるで、飯坂の熱い湯に私だけ足先さえ入れず、拒絶をくらった気持ちに似たようなものがあり、寂しさと共に「別にいいけど」という意地がいつもあった。

だが、東日本大震災で、たくさんの親切を頂き、三人の出産、子育てを経験するなかで、様々な方からの愛情を受け、次第に私の心は和らぎ、この福島という土地が大

好きになった。急かさず、焦らず、じんわりと染み入るような福島という風土と、そこに息づく人柄がゆつくりと私を福島市民として、この地に馴染ませた。

嫁いだ当初、私に疎外感を感じさせた、あの共同浴場は今も変わらない。

だが、今の私はあの共同浴場こそが、福島市の市民憲章が根付いた素晴らしい場所なのではと思う。

豊かな源泉と、古くから守り続けてこられた趣ある文化。

そして多少強引なほどの親切と愛情を丸出しにした年配者が、熱い湯の入り方を教示してくれる。そこには、独自のきまりがありながら、守ることで皆が気持ちよく入れるようになっており、年寄りから子供まで、健康やりフレッシュを目的に集う場所となっている。

今も熱い湯は苦手だ。だが、私は私の楽しみ方を見つけた。高い天井に「カーン」と桶が響く音が好きだ。

大切に、大切に後世へ伝えたいもの。そういうものが福島市民一人に一つあれば良いなと思う。母校でも、好きな景色でも良

い。滋味深い郷土の味でも良い。

私にとつて、あの共同浴場がそうであるように、この土地を好きだという愛着は、自身の心を安定させ、そして周囲への優しさ、将来への責任感を生む。

急がず、焦らず、ゆつくりと良い。日々の生活の中で、福島市の素晴らしい所を感じ、この地に愛着を持って生きる人が増えて欲しいと願う。

銀賞

「図書館から発信する

福島市の魅力」

ペンネーム

あかしおなすび

「飯坂電車に乗って、温泉に行きます。」

これは、ある大学生に聞いた休みの日の過ごし方だ。寮のお風呂が共同で時間の制約があるため、たまにはゆっくりとお風呂に入りたいたのだそうだ。

忙しい学生生活の中、福島市を満喫していて、なかなか微笑ましい。

別の学生からは、他県に住むご両親が遊びに来てくれるという話も聞いた。福島市の果物を楽しみにしているというのだ。

一方で、

「福島市、何もないですよね。」

という学生もいる。これは、致し方ない。私自身、福島市の魅力を知り始めたのは、三十歳代を過ぎてからなのだ。

私が好きな福島市。体験であれば、登山、果物狩り。食であれば、果物、米、円盤餃子。

好きな景観は、花見山、浄土平。それに温泉などなど。これらはすべて、長い年月をかけて私の中に育まれたものである。一言で語ることが難しい、来てみて、体験してみてわかる魅力があるのが福島市なのだ。

しかし、縁あって福島市に来てくれた多くの人にその良さを伝えられないということとは、もったいないことであると感ずる。福島市を離れる際には、福島市の良い思い出を持って帰ってもらいたい。または、卒業しても福島市で暮らしたいと思っしてほしい。そう思う。

私は、公共図書館で働きたいと考えている。そこで、郷土資料コーナーから福島市の魅力を発信していきたい。

福島市には魅力があふれている。一つ一つのパンフレットはよく作りこまれているし、企画は面白いものも多い。しかし、それらの一つ一つが連動されていないので、福島市という存在がぼんやりしてしまい、全体像が見えにくく感じられるのである。

福島県立図書館や福島市立図書館には、多くの郷土資料がそろっている。福島市をじっくりと知るには良い場所である。しか

し、それとは別に、もう少し気軽に福島市を知ることができるコーナーや、興味を持つための糸口を作りたい。

観光パンフレットやガイドブック、福島市の案内本、PR動画をすべて集め、展示や上映をする。そこから、各自の興味ごとに登山コーナー、植物のコーナー、温泉のコーナーなどへと興味を深めていけるのが、図書館の強みである。市立図書館の分館である西口ライブラリーであれば、観光案内所や観光物産館との連携もとれる。

魅力ある福島市を自分もより深く知り、地元の人、縁が繋がった人みんなに伝えていきたい。

銀賞

「つなげる温かさ」

浅野 真実

私が伝えたい福島の良いところは、人が温かいところです。この点については、一度福島を離れた後に気付きました。

私は大学四年間を県外で暮らしていました。その際、車を運転している人の穏やかさや、話し方など、福島との地域性や人柄の違いを感じる場面が度々あり、やはり自分は福島で暮らすのが合っていると思いき、就職し福島へ戻ってくることを決めました。

福島へ戻ってきた後も、働く中で地域の人の温かさを感じるが多々ありました。いかにも新社会人の格好をした私に、地域の方が「頑張ってるね」「いつてらっしゃい」などと声かけをしてくださったことでこちらも笑顔になれたことが何度もありました。また、私がお客様対応を誤ってしまった際に「勉強頑張ってる」などと成長をうながしていただいたこともありました。

このような人の気持ちの温かさを感じることでできた経験から、自分も人に温かい気持ちで接することができるようになりました。社会人になって数年経った今、今度私が地域の「温かい人」になっていくべき時なのだろうと思います。

私が育ててもらったこの福島をつなげていくためには、私も含めた一人一人が他人に対して温かく接していくことが大切です。優しく接してもらった人がまた別の誰かに同じように接していくことで、この温かい環境をずっとつなげていくことができますでしょう。

銅賞

「伝えたい わたしたちのまち」

ペンネーム

焼きサバ塩定食

「都会に一回住むと、帰ってこれないよ。福島市はほんと何にもないからね。」これは上京した兄の口癖だ。県外に行ったことがある人なら共感を得られると思うが、外の世界を見ると、やはり「福島市にはないもの」に、とても目が行ってしまう。では、「福島市にあるもの・福島市にしかないもの」は何か考えたことはあるか。実をいうと私は何度もある。私は学生の頃、研修の一環として東京をはじめ、岡山、熊本など、県外各地に行く機会に沢山恵まれたからだ。そんな私が「伝えたい わたしの福島市について」、稚拙ながらもまとめていきたいと思う。

まず福島市は、食に関してとても満たされていると感じている。お米、野菜、果物、お酒、地域の伝統的な食べ物やスイーツ、全国に誇れるものを挙げたらきりがなく

らい、素晴らしい食の宝庫だ。また、それをアピールする能力も非常に高い。震災後のマイナスイメージを払拭するため、血の滲む努力を間近で見てきたからこそその鼻根目かもしれないが、安全安心な商品に徹底的にこだわる姿勢・商品にプライドを持って日本各地や海外に出向いて売り出す行動力。これは単に、利益を得ることだけが原動力ではないと、言わずとしても伝わるものがある。

次に、福島市は街と自然環境の調和がちょうどいい。駅前も道路も商店街もほとんど緑が整備されており、「花いっぱい運動」と書かれたプランターには毎年きれいな花が咲いている。今まで各都市の駅を観察してみたが、福島市ほど緑化に力をいれて街づくりに取り組んでいる所は、なかなかないと思っている。人工的ではなく、自然と共生しているような街、古閑裕而も思わず軽快なメロディーを口ずさみたくなる街、それが福島市だと感じた。

上記二点から、福島市は最高の宝の街だと思う。が、あえて最後に、それを上回る、これこそ宝だと思ふものを述べたい。それ

は福島市の若者だ。前述したが、私は学生時代、福島市の代表として全国各地を仲間とともに回った。卒業を機に、それぞれ県内に散ったが、つい先日、その仲間と時間を合わせて久しぶりに会った。震災後、私たちが望んだ・願った福島市の未来に對するそれぞれの想いを胸に、各々が頑張っていると彼は話していた。公務員になったあの仲間は、震災後の恩返しをするために故郷へ帰ってきたと。別な仲間は、教員となり福島市にはいないが、震災を肌で知らない他県の学生に、どうしたら震災後の歩みを伝えられるのだろうかと模索していた。別な仲間は、原発事故後、地球に優しいエネルギーを開発したいと研究室を志望していると。皆、それぞれの場所で、福島市への想いを胸に頑張っているんだと改めて知った。

兄が言うように「何もない福島市」かもしれないが、私はそれでも福島市は十分に満たされていると思う。食に、自然に、若い力にこれから進んでいく福島市の未来が、更に心豊かな故郷になることを私は心から願っている。

銅賞

「自然に包まれる温かい福島市」

ペンネーム

南 あゆは

私が住んでいる福島市は、山・川・緑と太陽の光・風に満ち溢れた自然の市です。私の習慣の散歩では路地裏や川沿い、住宅街、店舗街を歩きますが、どこを切り取っても景色は温かみのある心が洗われる一瞬一瞬が大切な瞬間です。

特に川を渡る橋から見る福島市を取り囲む壮大な山々、橋から見下ろすと見える川のきらきらした太陽の光の反射の動いている模様、周りから感じる太陽と風のエネルギーは福島市のパワーです。

また、街の雰囲気や、夕方の住宅街の灯りを見ると福島市の温かさを感じることが出来ます。

今までずっと福島市で生きてきて、自然の恵みと人の温かさに支えられて生きてきました。福島市の魅力をもっともっとこれからの人生発見していきたいです。

市民憲章には福島市民としての心構えが示されています。人と人との繋がりを大切にしてよりよい福島市を、私の大好きな福島市の自然を守るため、福島市に愛と誇りを持って生き生きと生活していきたいです。皆が生き生きと自己実現に向けて努力する社会、自分の目標実現だけでなく他人も思いやり支え合う社会、そうした社会の実現が福島市のよさが発揮できる、未来に希望が持てる明るい福島市、そして市民憲章の実現に繋がり、これからの未来も市民憲章が市民の心の灯し火、支えになると思っています。

私の大好きな福島市がよりよく発展していくように私も社会の一員として市民憲章に示してある守りたい福島市のよさを胸に刻んで、福島市に貢献していきたいです。

銅賞

「伝えたい創りたい私達のまち」

佐藤 正幸

私達のまち福島市は、市民なら誰でも知っているとおり、四季の自然が美しく、果物が美味しく、人情味に富んだ住みやすいまちです。

私はこのまちを、もっともっと誰もが住みたいと思える場所にしたいと考えています。つまり、健康な人はより健康に、病気の方は快方に向かい、障がいのある方も皆と仲良く暮らせるまちにしたいのです。温泉、医療機関は既に充実しています。あとは障がいのある方にとって、より住み良く楽しいまちにすることが目標です。

先日、大笹生体育館で市長杯をかけたボッチャ大会が催されました。私も出場させていただきましたが、年令や職業が異なり、そして障がいの有る方無い方が一堂に会して一つの目標に向かって戦った素晴らしい大会でした。

試合直前に車イスの少年が私に向かって

「よろしくお願いします。」試合直後に「有難うございました。」と元氣良くあいさつしてくれました。試合自体も楽しく、私は「これだ」と思ったのです。

病気や障がいの有無にかかわらず、お互いにあいさつし合い、楽しく交流し、また家に帰っていく。この関係性をまち全体に広げることができたらどんなに良いでしょう。

病気の方は病院の中だけで過ごし、障がいのある方は施設に閉じこもる。そんな生活はもう古いのではないのでしょうか。今、障がいのある方が街中で暮らすグループホームが増えていると聞きます。働く場所も少しずつ増えているようです。

福島市は県都です。このような先進的な取り組みをもっともっと進め、県内各市町村のトップランナーとして誇り高く名乗りを上げて欲しいです。私も市民の一人として、病気の方や障がいのある方に偏見を持つことなく、必要な付度もすることなく、同じ市民どうしとして仲良く暮らしてゆきたいと思います。



市の鳥
シジウカラ



市の木
ケヤキ



市の花
モモ

昭和48年4月1日制定 福島市

わたくしたちは、みどりにつつまれた信夫山と清い流れの阿武隈川をもつ福島市民です。
福島市は、地味豊かなしのぶの里に古くから開けた人情の美しいまちです。
わたくしたちは、平和で、さらに住みよく希望にみちた
まちをつくるためこの市民憲章をさだめます。

安全で健康なまちをつくりましょ
子どもから高齢者まで
みんなが笑顔になれるまちをつくりましょ

力をあわせて
楽しく働ける
まちをつくりましょ

親切で愛情あふれる
まちをつくりましょ

教育と文化を尊び希望に
輝くまちをつくりましょ

空も水もきれいなみどりの
まちをつくりましょ